

# 『日本言語地図』偏在分布Ⅱ語形地図集

——西日本分布・東西対立分布・三地域鼎立分布——

安部清哉

キーワードⅡ分布パターン、重層性、『日本言語地図』、西日本分布・東西対立分布・三地域鼎立分布・九州分布・古代日本語対応基礎語彙

## 語形分布地図 目次

### 【付言】

表1 「古代日本語対応基礎語彙」一覽

I 西日本分布語形地図（括弧内は関連拙稿）（注1）

### （1）【語彙】

- ① カワズ総合地図——LAJ219、223「藝」「おたまじゃくし」（安部1993c・1996a）
- ② タニグク総合地図——LAJ218、223「蛙」「藝」「おたまじゃくし」（安部1990）

- ③ ヨム——LAJ69「数える」(安部1990・1991)
- ④ ツジ——LAJ102「旋毛」(安部1986・1988a・1991)
- ⑤ センザイ——LAJ193「庭」(1988・1991)
- ⑥ カザ——LAJ85「匂を(嗅ぐ)」
- ⑦ ミズクサイ——LAJ38「(塩味が)うすい」
- ⑧ アマル——LAJ95「(雷が)おちる」
- ⑨ ホウル——LAJ62「捨てる」
- ⑩ ニッテン——LAJ251「太陽」(安部1989C・1991)
- ⑪ セオウ——LAJ65「しょう」
- ⑫ イカノボリ——LAJ143「凧」

(2) 【文法】 (国立国語研究所『方言文法全国地図』(GAJ)より)

- ① 動詞終止形重複形——GAJ141「食いながら(歩くな)」(安部1997a・c)

(3) 【音韻】

- ① メー——LAJ110「目」(安部1989b・1991)
- ② しゃ——LAJ46「だ」(安部1993b)

II 東西対立分布語形地図

- ① イル||オル——LAJ53「居る」

III 三地域鼎立分布語形地図

- ② ヒコ||ヒマゴ——LAJ139 「ひまご」
- ③ ケム||ケムリ——LAJ265 「煙」
- ④ ナス||ナスビ——LAJ181 「茄子」

IV 九州分布語形地図

- ① オブウ||オウ||カルウ——LAJ64 「おんぶする」
- ② ショウ||オウ||カルウ——LAJ65 「しょう」
- ③ キュウ||ヤイト||ヤツ——LAJ83 「灸(をすえる)」

V 方言圏論から見た日本語方言の重層性(注2)

- ① アユル——LAJ95 「(雷が)おちる」
- ② カルウ——LAJ65 「しょう」

## 【付言】

本稿は、安部（1989a）『日本語地図』三辺境分布・東西辺境分布Ⅱ語形図集』の続編として編んだものである。

これまでの言語地理学、あるいは、言語地図の解釈と文献資料の解釈とを対照させた研究においては、個々の（または、意味的に関連する）地図や語形を取り上げる場合が殆どで、無関係の項目における類似する分布を相互に対照させて、そこに見られる共通点なり相違点なりを、方言分布の成立過程（「方言史」、あるいは、広義の「日本語史」という全体的視野から検討する段階には至っていない）であった。

全国規模の方言分布を見ると、その中には類似した分布を示す語形が少なからず認められる。今回、ここにまとめたものは、国立国語研究所編『日本語地図』（LAJ）において、類似した分布を示す語形の中から、特に、西日本に偏る分布、東西対立をなす語形の分布、東日本・西日本・南日本（主に九州以南）の三地域で分布が鼎立している三地域鼎立分布、九州（以南）に偏る分布、を示す語形を選び出し、その一部を分類したものである。

これらの語形のいくつかに関しては、既にその当該地図について、個々に言語地理学的解釈や文献国語史との対照などの考察が行われてきている。また、本稿執筆者も、個々の地図の解釈をいくつか試みつつ、これら全体についての統一的観点からの解釈を試みてきた。現段階におけるその解釈を示したものが、「V 方言圏論から見た日本語方言の重層性」の図である。

この図のような過程を経たことが、「三周辺分布（三辺境分布）」（安部1989a・1991）のような残存分布を多く残すことにつながっていると考えられる（注3）。

このうち、一番古い段階に関しては、文化の中心と、そこからの語の伝播による分布形成という、いわゆる「方言圏論」的解釈のみでは、十分に解釈しつくすことが難しい。その問題については、安部（1993a・1994b）

に述べてある。その部分については、「方言圏論」とは別の観点から解釈を加える必要があり、別稿にて述べる機会を俟ちたい。

また、全国的に広く分布する古い語と、西日本側に偏って分布する語との間には、同じような意味を表しながらも、語形の相違が認められる。表1に「古代日本語対応基礎語彙」として掲げたものがそれである。これらの対応する語の相違が、どのような時代的、また、質的相違を示すものであるかは、今後の課題である(注4)。表についての詳しい説明は、稿を改めて行うことにしたい。

なお、参考地図として、Iの【文法】に、国立国語研究所編『方言文法全国地図』(GAJ)から、41図「食いながら(歩くな)」(注5)を取り上げている。文法事項ではあるが、分布の解釈において語彙事項との共通性が認められるのでここに取り上げた。これについては、安部(1997a・c)を参照されたい。

表1 「古代日本語対応基礎語彙」一覧 (安部一次試案)

| 【基礎語彙】 | 意味      | 西日本層基礎語彙            | 古代全国層基礎語彙               |
|--------|---------|---------------------|-------------------------|
| ス 4    | ashes   | ハヒ(↑?灰「橋本萬太郎1988」)※ | 阿克(灰・灰汁・肉汁の浮滓・植物の苦味・塵芥) |
| ス 21   | earth   | —                   | ナ、ツチ                    |
| ス 24   | eye     | —                   | マ、マナク or マナコ(目・黒目)      |
| ス 195  | wind    | —                   | シ、カザ?【カゼ↑カザ(↑?カ・シ)未詳】   |
|        | ankle   | クルブシ                | キビス(↑クヒ・ヒス)「小林隆1982」    |
|        | eyebrow | マヨ(↓マユ)※            | — (無名  カホ・ノ・ケ「顔の毛」)     |
|        | cliff   | —                   | ママ(崖・傾斜地)【ガケ未詳】         |

【語法】

|       |               |                   |
|-------|---------------|-------------------|
| count | ヨム            | カゾヘル              |
| frog  | カハツ (? ↓カヘル)  | ヒキ (蛙類総称)         |
| heel  | キビス (踝から転)    | アクト・アド (踝)        |
| horse | —             | コマ【ウマ・ムマ (↑馬) 保留】 |
| ridge | アゼ (? ↑ア・セ) ※ | クロ (田の他、畑・諸々の境界線) |
| toud  | タニグク          | ヒキ (蛙類総称)         |

授与動詞

有視点性 (ヤル／クレル)

無視点性 (クレル／クレル)

[日高水穂1994]

動作併行

終止形重複形・ガテラ

—

[安部1997a]

注 スイスワディシユの基礎語彙番号

※ 西日本層の中でも、分布上、別に考えられる可能性があるもの

## 注

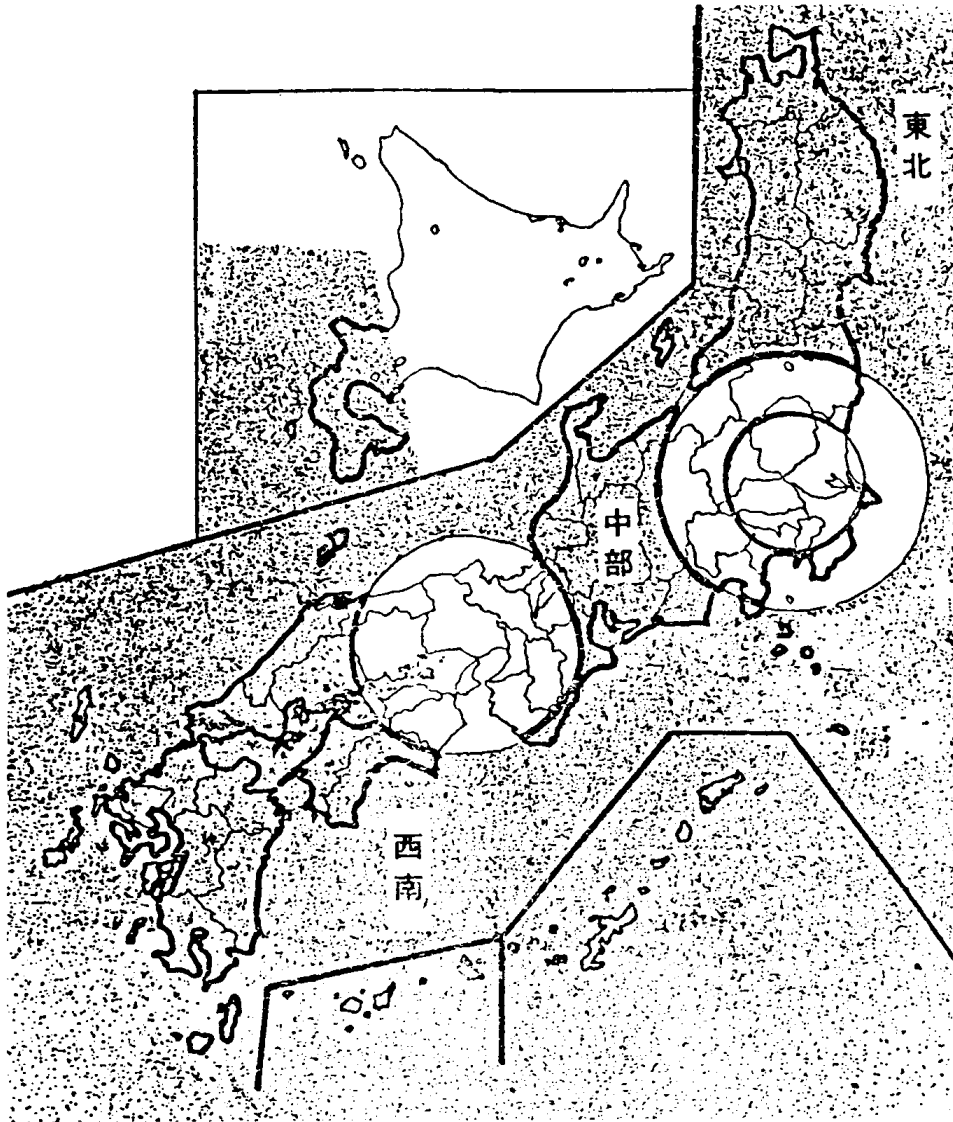
注1 西日本側に偏った分布をなす方言（関東も含んだ西側寄り分布の場合も含め）の中には、その成立の上で、様々な性格のものが混在していることが考えられる。言語地理学の観点から見ただけでも、現時点では、少なくとも2種類の相違があることが、本稿執筆者には看取される。「I 西日本分布語形地図」の西日本語形は、そのような内部的区別なく一括してまとめたもので、今後それを検討する必要があると考える。

「V 方言圏論から見た日本語方言の重層性」の中の「西日本伝播層」は、そのような西日本分布のうちの一パターンを、模式的に位置付けたものである。「西日本分布語形」のすべてが「西日本伝播層」の語形ではないので、その点をお断りしておきたい。

注2 「V 方言圏論から見た日本語方言の重層性」の図は、平成6・7・8年（共に夏学期）における朝日カルチャ―・センター（新宿）の「日本語教師養成講座」の執筆者担当授業（日本語の方言）において、補助資料として配布してきたものの一部である（英訳部分のみ、新たに付した。また、他の図の幾つかも、同様に補助資料である）。内容的には、これまでの拙論（参考文献参照）にて述べてきたことを簡略に図示したものであるが、このようなかたちで公表するのはこれが最初であるので、あえて右の点を付記する次第である。

注3 「日本列島は南北に細長いため、かつて文化の中心地から伝播した語が、東北と南西の西側に残存することが多い（東西境界分布）。また、文化の中心地が近畿から関東へと移動したことにより、京阪と東京の二つを中心とする「二重圏分布」が形成されるため、近畿圏と関東圏に挟まれた北陸・中部・東海にも古語が残ることが多い。南北とこの中間部の三箇所に同じ語が残存するような分布を「三境界分布」と呼ぶことにする。なお、ここでの「境界」とは辺鄙な所という意味ではなく大都市を含んでおり、あくまで方言学上の概念である。」（安部1991）  
いま「境界」ではなく、「三周辺分布」と呼ぶことにしたい（左図参照・安部1989aより）。

三周辺分布概念図





注4 「古代日本語対応基礎語彙」について、念のため言い添えておけば、例えば、「古代全国層基礎語彙」を南方言語（南島語など）と比較し、「西日本層基礎語彙」を北方言語と比較する場合において（あるいは、その逆であっても）、その結果については、次のような問題が残っていることを考慮しておく必要がある。それは、少なくとも、この2つの点については、さらに複雑な構造を想定しておかなければならない、と考えられるからである。

(1) 「西日本層基礎語彙」には、いま、糸魚川・浜名湖線以西の西日本に偏る分布のほか、関東を含んでそれ以西に偏る分布を含めたが、その2者が異なった性格をもつものである可能性を考慮しておく必要がある（注1、並びに、表1の注※参照）。

(2) 糸魚川・浜名湖線以西の西日本に偏る分布が、歴史的に等質とは限らない可能性を考慮しておく必要がある。(2) について補足説明すると、東西境界線の糸魚川・浜名湖線は、地理的な中央構造線の存在に依存しているものであるので、古代から現代に至るまで、相当の長期に亘って累々と形成されてきているものであると考えられる。

そのなかで、Vの図で「西日本中央語伝播層」とした段階においては、それよりもはるかに古い時代の（しかも、性質の異なる）方言を、新たに中央語として採用して周囲に伝播させているような場合があることも、考えておかなければならない。

このことを分かりやすく説明するため、ウロコの分布の歴史を例として挙げてみたい。魚の鱗をいうウロコは、いまは共通語として全国で使われている。しかし、このウロコは、時代を溯ると、かつて西日本方言であった語である。それは、古い文献資料とL A Jがあることで明らかにされているのであるが、一般には、かつては西日本の方言であって、東日本ではコケと言っていた、ということも、もはやわからなくなっている。

ウロコは、共通語という「中央語」として採用されたため、それ以外の多くの東日本方言と同じように、近代全国層（共通語）を形成することになった。しかし、その出自は、ほかの東日本方言とは異なっているのである。

(2) は、この共通語（近代全国層）におけるウロコの場合のような事態が、西日本中央語伝播層の中でも生じている可能性を考慮しておく必要がある、と考えるものである。それは、例えば、具体的には、西日本分布語形の多くはA方言語であっても、中央語として採用された語形の中に、分布範囲の狭い、ある種の底層語的性格の方言語彙があり、それは、溯るとA方言語とは異なった出自をもっているというような場合である。

SEVERAL STRATA IN THE HISTORICAL FORMATION OF JAPANESE DIALECTS

| Stratum   | 言語地理学から見た日本語方言の重層性  | 時代                | Age                                       |
|---|---|-------------------|---|
| 1st Substratum<br>(wide distribution)                           | 日本語基層語<br>aku(ash) amo(mother)<br>hoderi(lightning)<br>akizu(dragonfly)<br>sugaru(bee·ant)<br><br>na(earth)<br>koma(horse)<br>nawi(earthquake), hiki(frog·toad)   | B.C.<br>↓         | B.C.<br>↓                                 |
| 1st Superstratum<br>(West Japanese Superstratum)                | 西日本上層語<br>Kanto-Echigo-Lines<br>Itoigawa-Hamanako-Line<br>(九州層?)<br><br>aze(ridge of the rice field ⇔ rice crop)<br>mayo(eyebrow = ? mayo(cocoon) ⇔ sericulture)<br>hai(← ΦaΦi ← * kwawi)(ash) ⇔ ? chinese 灰 [kuai] | 文献時代以前            | A.D.                                      |
| West Japanese Stratum<br>(2nd Superstratum)<br>(spread stratum) | 西日本層 yomu(count ⇔ letter·calendar)<br>(西日本中央語伝播層)<br>Itoigawa-Hamanako-Line<br><br>京畿 Keiki<br>(奈良·京都 Nara·Kyoto)   |                   |   |
| West Japanese Stratum<br>(spread stratum)                       | 東日本伝播層<br>西日本中央語伝播層<br><br>京畿 Keiki<br>(京阪 Keihan)<br><br>rai(thunder)  | 上代・中古・中世・近世・近代・現代 | 12 C<br>18 C<br>19 C                      |
| East Japanese Stratum<br>(spread stratum)                       | (関東)・江戸<br>Kanto·Edo  |                   |   |
| Common Japanese Stratum   | 近代全国層 (共通語)<br><br>東京 Tokyo   | 20 C              | KINDAI<br>MEIJI-TAISHO<br>SHOWA<br>GENDAI |

いま、この現象を「方言の中央語化による再生 (dignified reincarnation of local dialect)」と呼んでおくことにしよう。この現象は、例えば、江戸語が形成されていく過程においても認められる。江戸市中が次第に拡大するに従い、周辺の方言を取り込んでいったことはよく知られている。それがやがて江戸語として周辺地域に伝播するようになり、中にはさらに共通語となるようなものも現れるに至る(例えば、マズイ(美味くない)、ガランドウ・ガラン(とした)など)。そのようなプロセスも、この「方言の中央語化再生」と呼べるものであり、それはまた、現代語においても確認することができる。普遍性のある言語現象と言うことができよう。

そのような「方言の再生」の繰り返しだが、日本語の歴史をさらに複雑にしている要因の一つになっていると考えられるのである。

以上のような、さらに複雑な構造の可能性の中から、その一つを、(1)に関わる部分についてのみ、あくまで一つの可能性として提示しておくとするならば、それは図のようなものになる。

仮に、この図のような段階まで仮説として考えられるとするならば、さらに、図の第2段目、「?」の部分として想定される選択肢は、おのずと限られてくることになるのではなからうか。

ところで、このような日本語の重層性と、「方言の再生」の繰り返しの現象とを考慮していくと、ある層(段階)の日本語は、ある面においては、それ以前の層の上層語である一方で、ある面においては、それ以後の層の底層語としての性格をも併せ持つてくることがあり得る、ということに気づかされる。これまでの研究では、そのような、日本語の「形成層の両面性」の問題は、あまり議論されてこなかったように思われる。

日本語の系統論において、基層語と上層語とをめぐるこれまでの諸説に、相反する説が併存して見られるが、その背景には、このような形成層の両面性の問題が横たわってはいないだろうか。どの層とどの層とを、どのような観点から比較しているかによって、導き出されてくる答えが逆転してしまう、ということが、ありはしなかったであろうか。

この図の中の、糸魚川・浜名湖線とは別の、もう一つの東西対立境界線と考えられる「関東・越後線群」の名は、徳川宗賢先生(学習院大学教授)に「関越線」の略称で頂戴したものであるが、この段階についての説明は、また、しかるべき時を俟つことにしたいと思う。

注5 GAJ41図作成担当は、佐藤亮一氏(東京女子大学現代文化学部教授)と聞く。

# I 西日本分布語形地図

## 【語彙】

### ① KAWAZU

(general map of KAWAZU in “TOAD(No.219, 220), TADPOLE(No.221~223)”)

カワズ (藝・おたまじゃくし) の総合地図

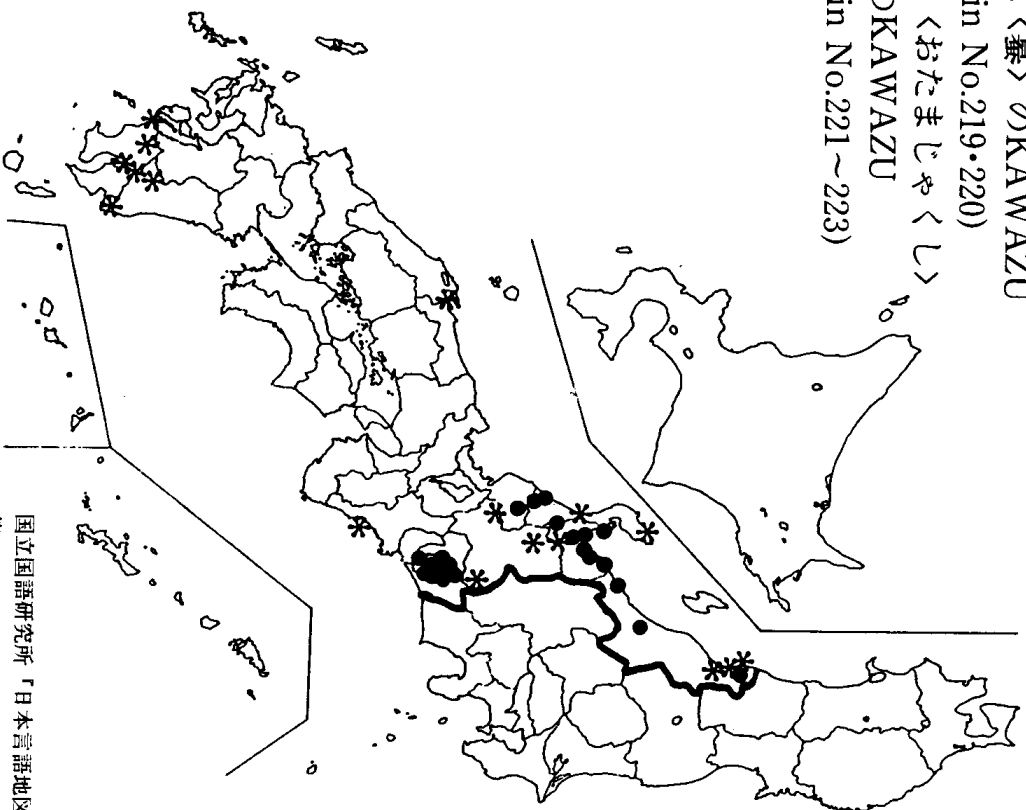
● : <藝> のKAWAZU

(in No.219・220)

\* : <おたまじゃくし>

のKAWAZU

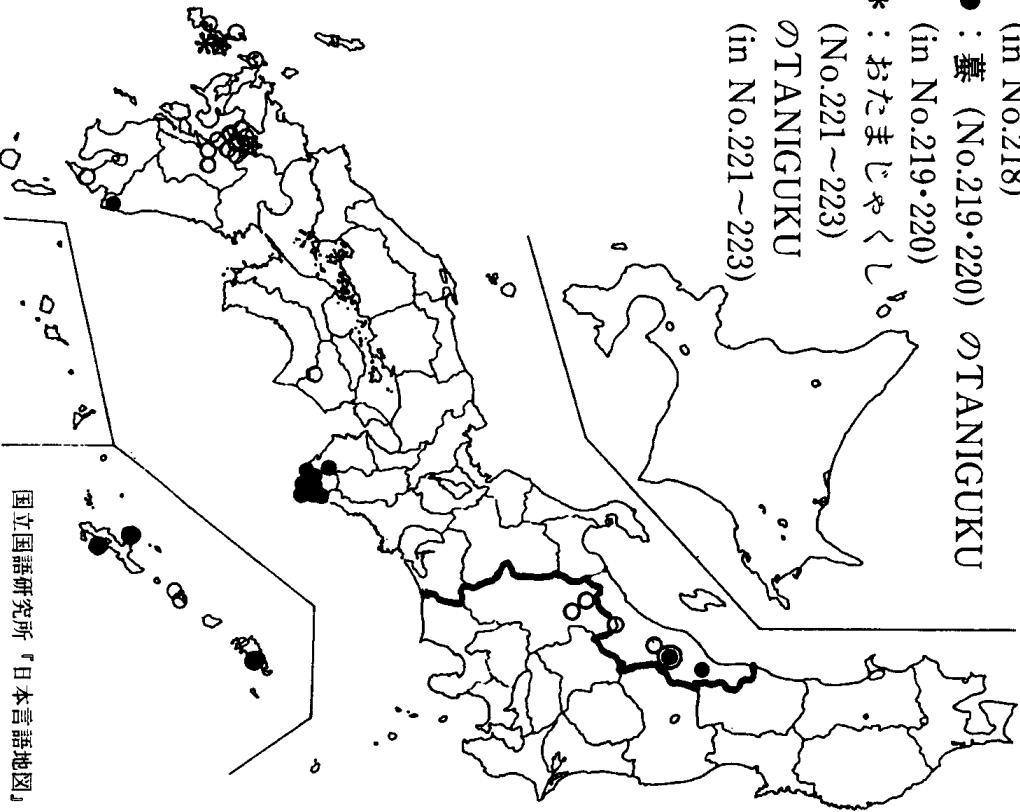
(in No.221~223)



② TANIGUKU

(general map of TANIGUKU in “FROG(No.218),  
TOAD(No.219~220, TADPOLE(No.221~223))”  
タニグクの総合地図

- ：蛙 (No.218) のTANIGUKU  
(in No.218)
- ：蟾 (No.219・220) のTANIGUKU  
(in No.219・220)
- \*：おたまじゃくし  
(No.221~223)  
のTANIGUKU  
(in No.221~223)



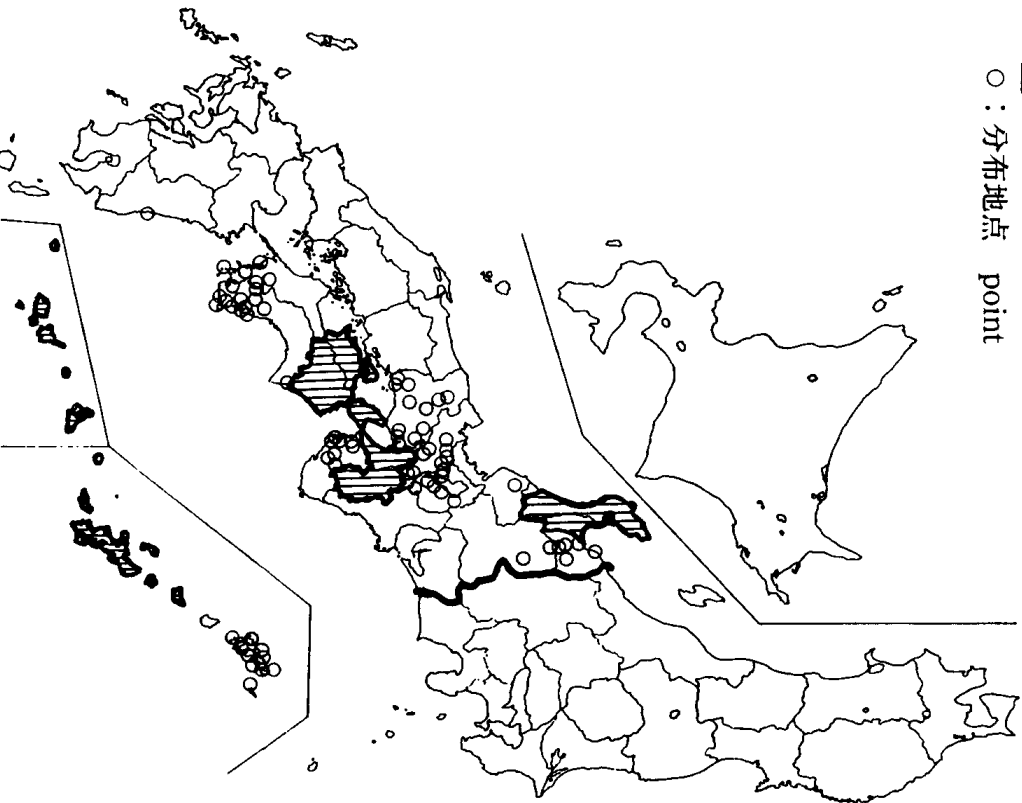
国立国語研究所『日本語地図』  
第218~223図により作図

③ L.A.J. No.69 “to COUNT”

〈数える〉の言語地図

ヨム = YOMU

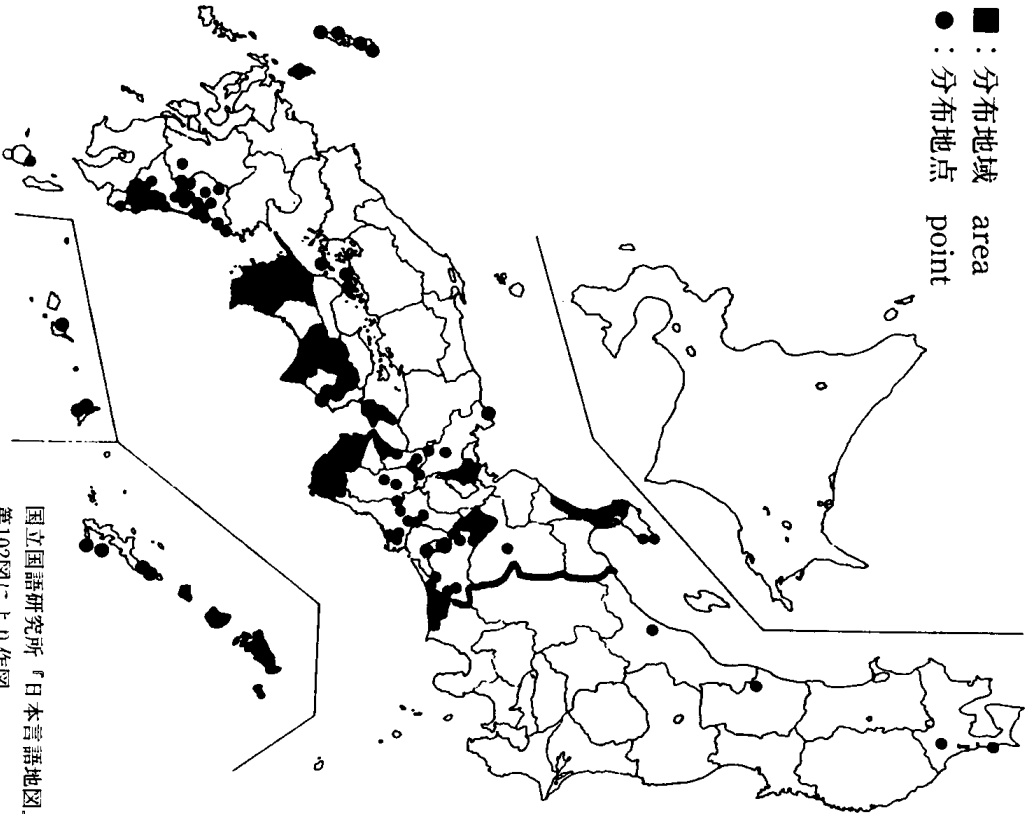
- ▨：分布地域 area
- ：分布地点 point



国立国語研究所『日本語地図』  
第69図により作図

④ L.A.J. No.102 “WHIRL of HAIR on the HEAD”  
 <旋毛>の言語地図

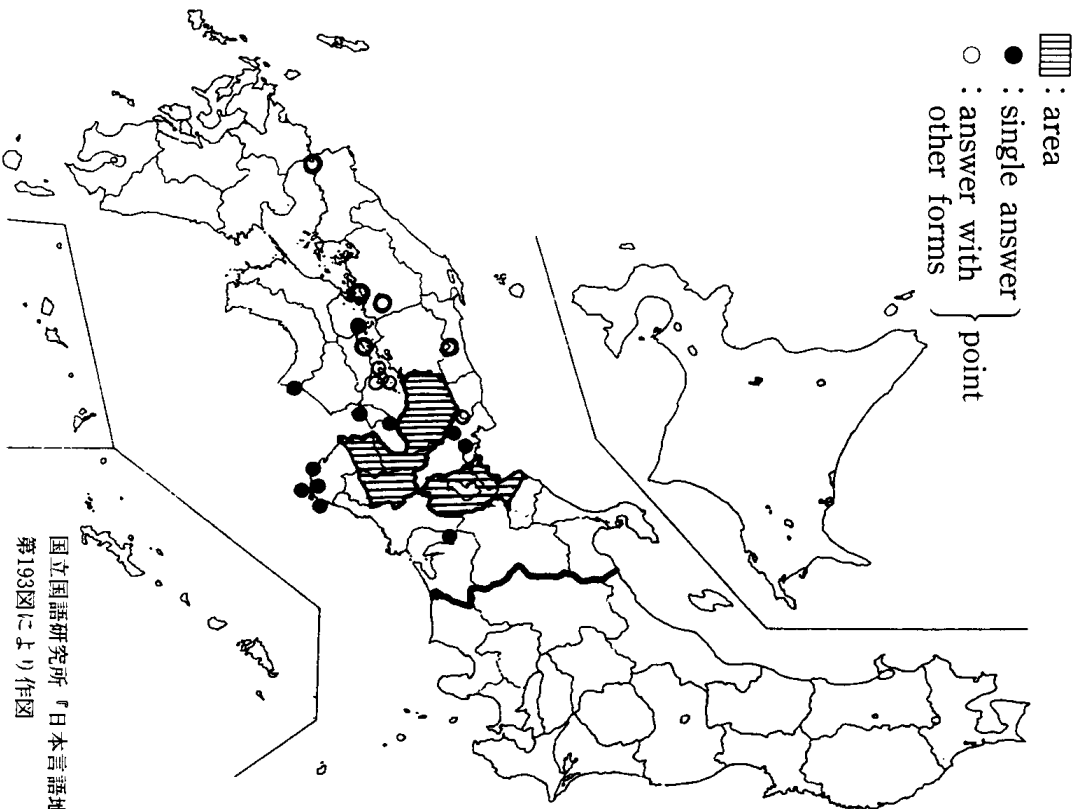
ツジ=TSUZI, TSUZI~, ~TSUZI  
 (ツジマキ、マキツジ)



国立国語研究所『日本語地図』  
 第102図により作図

⑤ L.A.J. No.193 “GARDEN”  
 <庭>の言語地図

センザイ = SENZAI

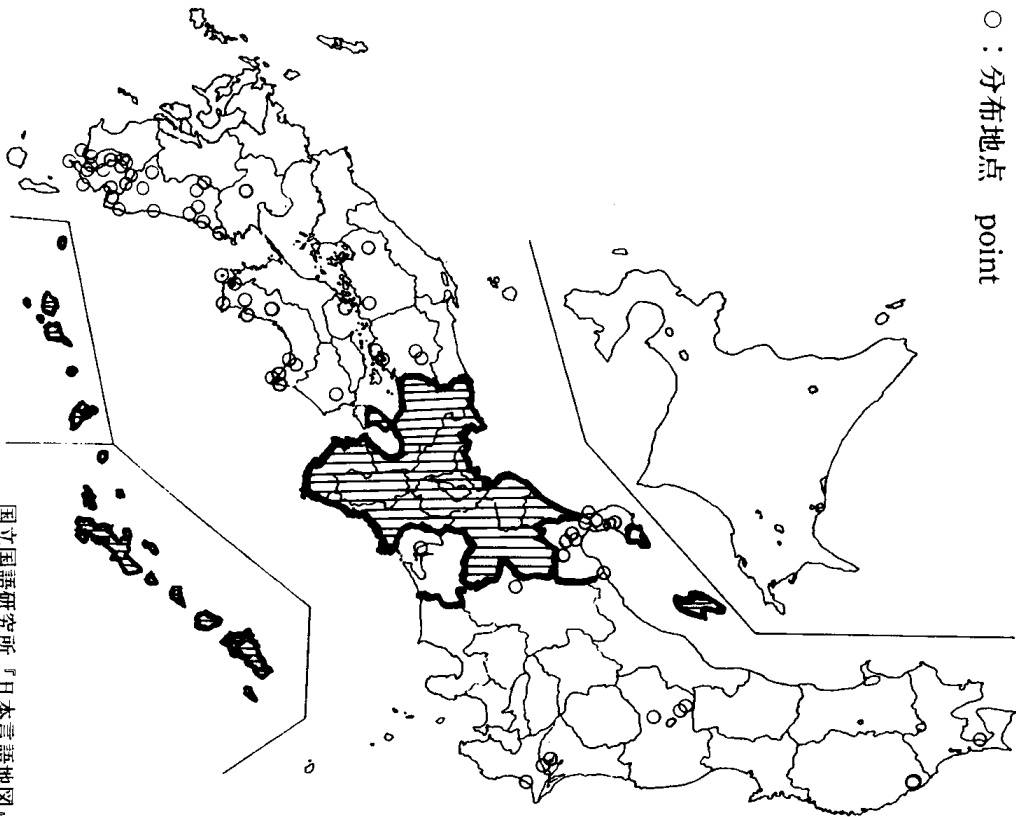


国立国語研究所『日本語地図』  
 第193図により作図

⑥ L.A.J. No.85 “to SMELL (object)”  
 <匂を (嗅ぐ)> の言語地図

カザ = KAZA

▨ : 分布地域 area  
 ○ : 分布地点 point

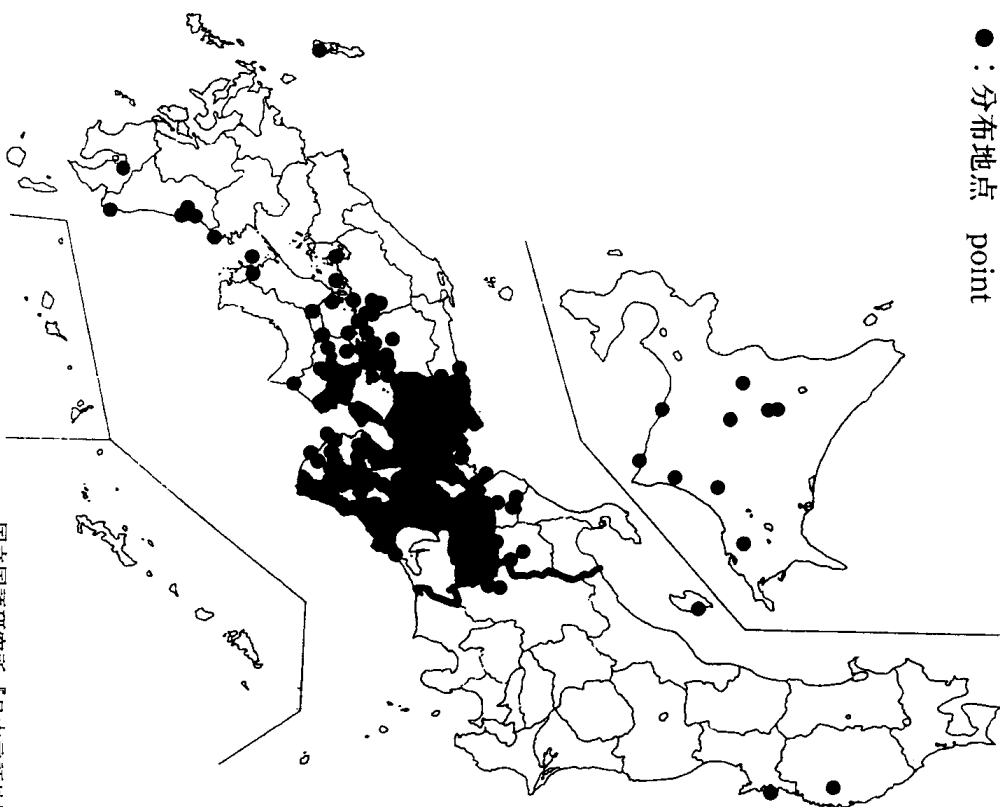


国立国語研究所『日本語地図』  
 第85図により作図

⑦ L.A.J. No.38 “WEAK, THIN (taste)”  
 <塩味が) うすい> の言語地図

ミズクサイ = MIZUKUSAI

■ : 分布地域 area  
 ● : 分布地点 point

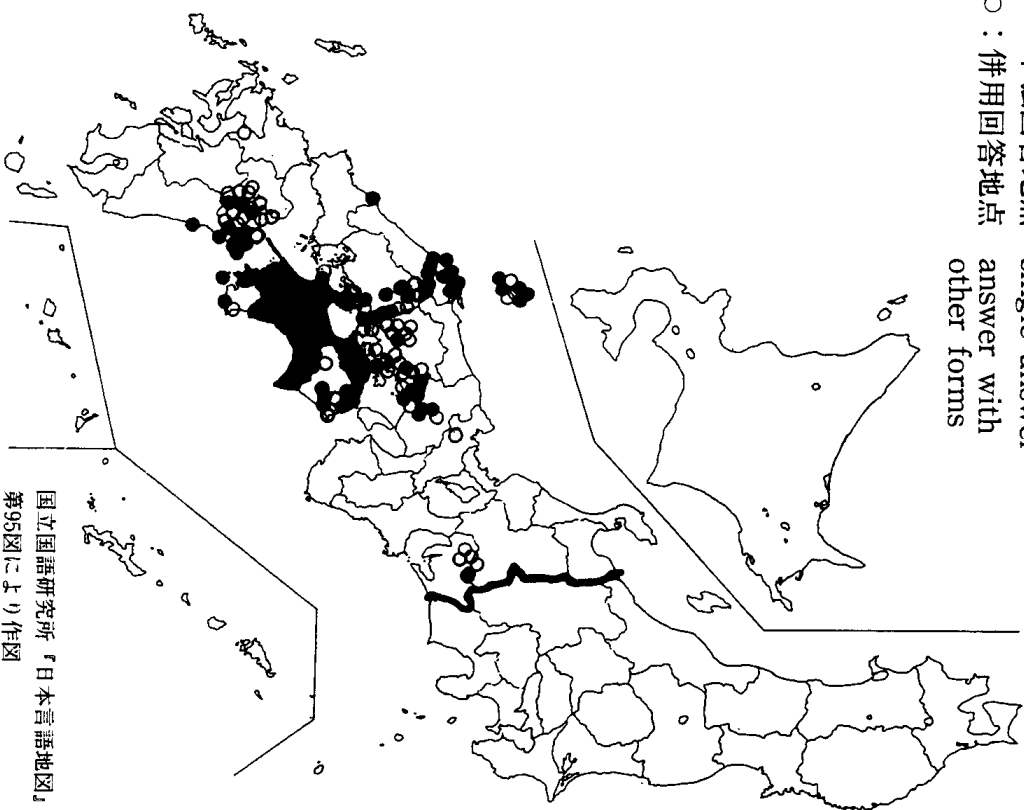


国立国語研究所『日本語地図』  
 第38図により作図

⑧ L.A.J. No.95 “<lightning> STRIKES”  
 <(雷が) おちる>の言語地図

アマル=AMARU

- : 分布地域 area
- : 単独回答地点 single answer
- : 併用回答地点 answer with other forms

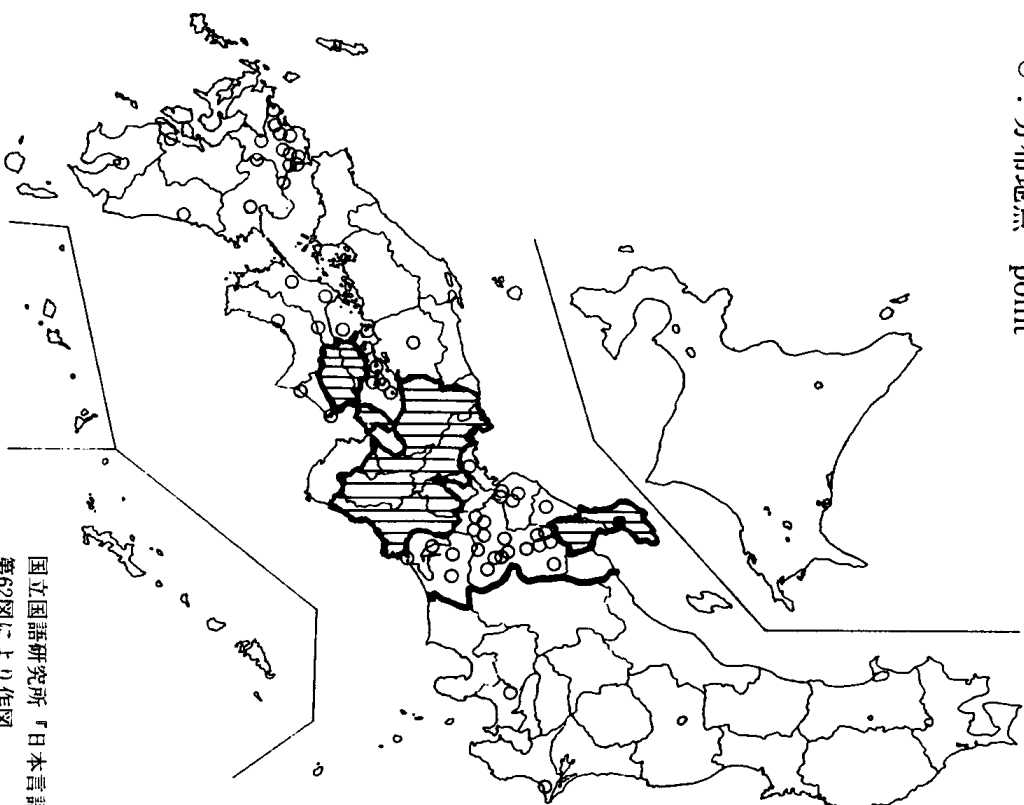


国立国語研究所『日本語地図』  
 第95図により作図

⑨ L.A.J. No.62 “to THROW AWAY”  
 <捨てる>の言語地図

ホウル=HOORU

- ▨ : 分布地域 area
- : 分布地点 point



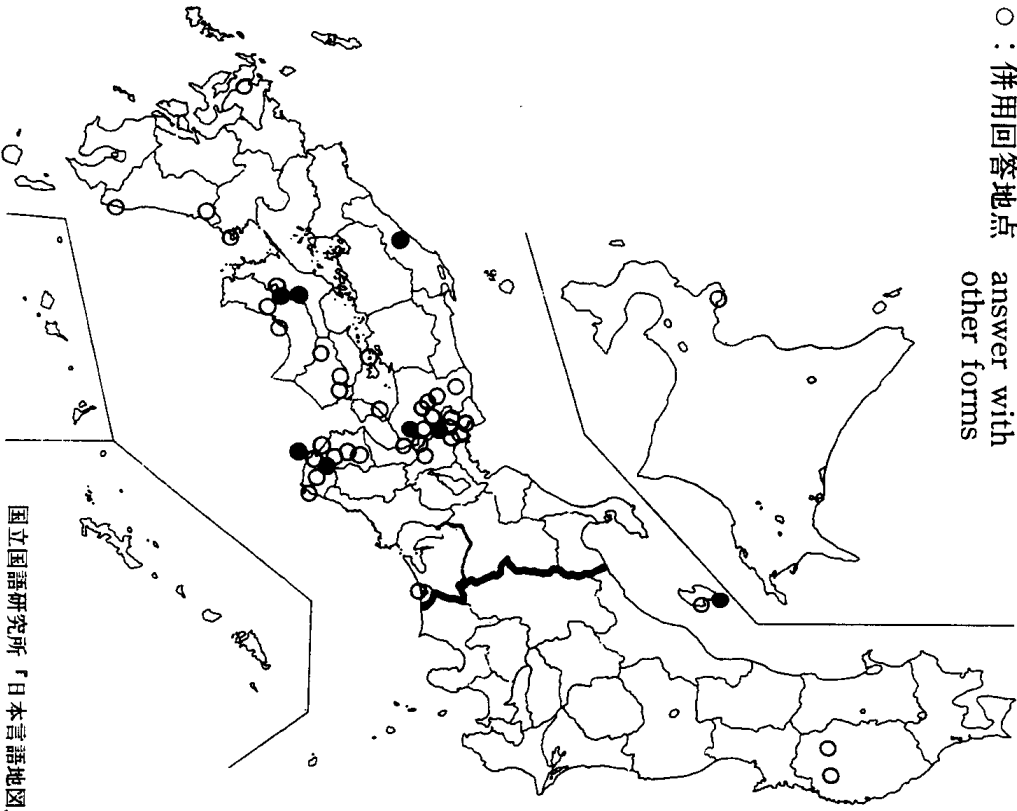
国立国語研究所『日本語地図』  
 第62図により作図



⑩ L.A.J. No.251 "SUN"  
 <太陽>の言語地図

ニッテン=NITTEN

- : 単独回答地点 single answer
- : 併用回答地点 answer with other forms



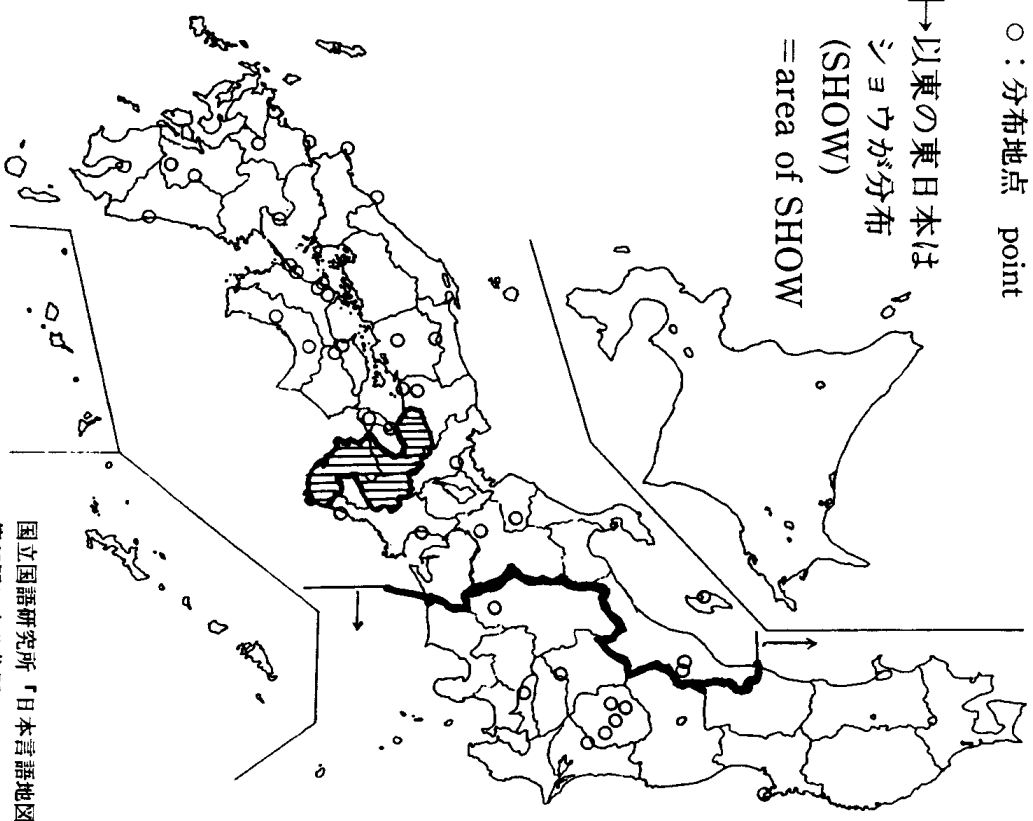
国立国語研究所「日本語地図」  
 第251図により作図

⑪ L.A.J. No.65 "to CARRY (a bundle on one's back)"  
 <しょう>の言語地図

セオウ=SEOU

- ▣ : 分布地域 area
- : 分布地点 point

→ 以東の東日本は  
 ショウが分布  
 (SHOW)  
 = area of SHOW



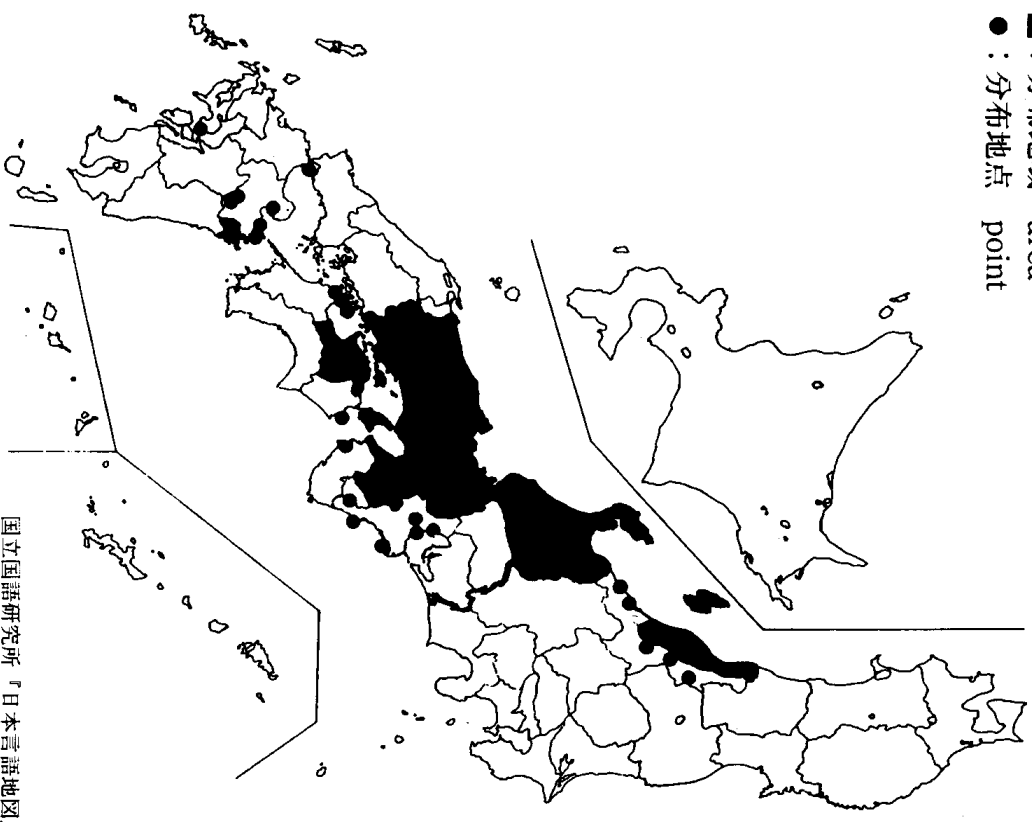
国立国語研究所「日本語地図」  
 第65図により作図

⑫ L.A.J. No.143 “KITE”

〈風〉の言語地図

イカノホリ=IKANOBORI

- : 分布地域 area
- : 分布地点 point



国立国語研究所『日本語地図』  
第143図により作図

【文法】

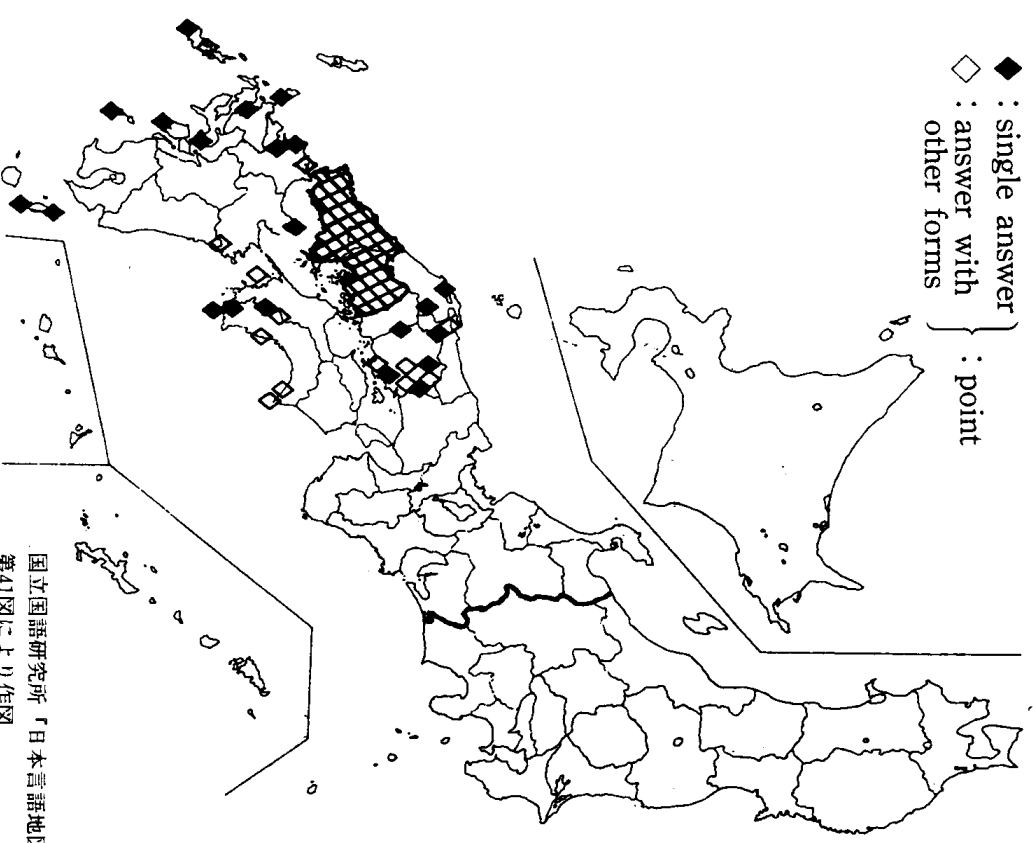
① G.A.J. No.41

〈食いながら〉の言語地図

終止形重複形  
reduplication form of Shushi-Kei of verb.  
(終止形)

- ▣ : area
- ◆ : single answer
- ◇ : answer with other forms

} : point



国立国語研究所『日本語地図』  
第41図により作図

【音韻】

① L.A.J. No.110 “EYE”

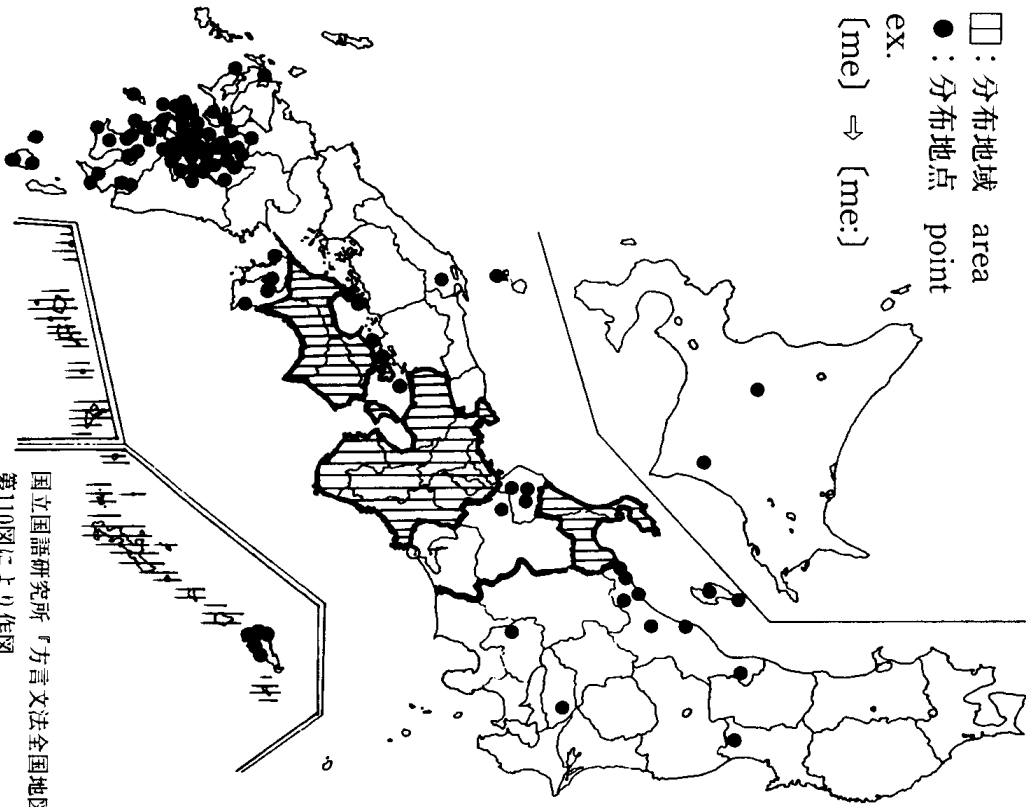
〈目〉の言語地図

長音語形 = [X:] a long vowel form

□ : 分布地域 area  
● : 分布地点 point

ex.

[me] ⇒ [me:]



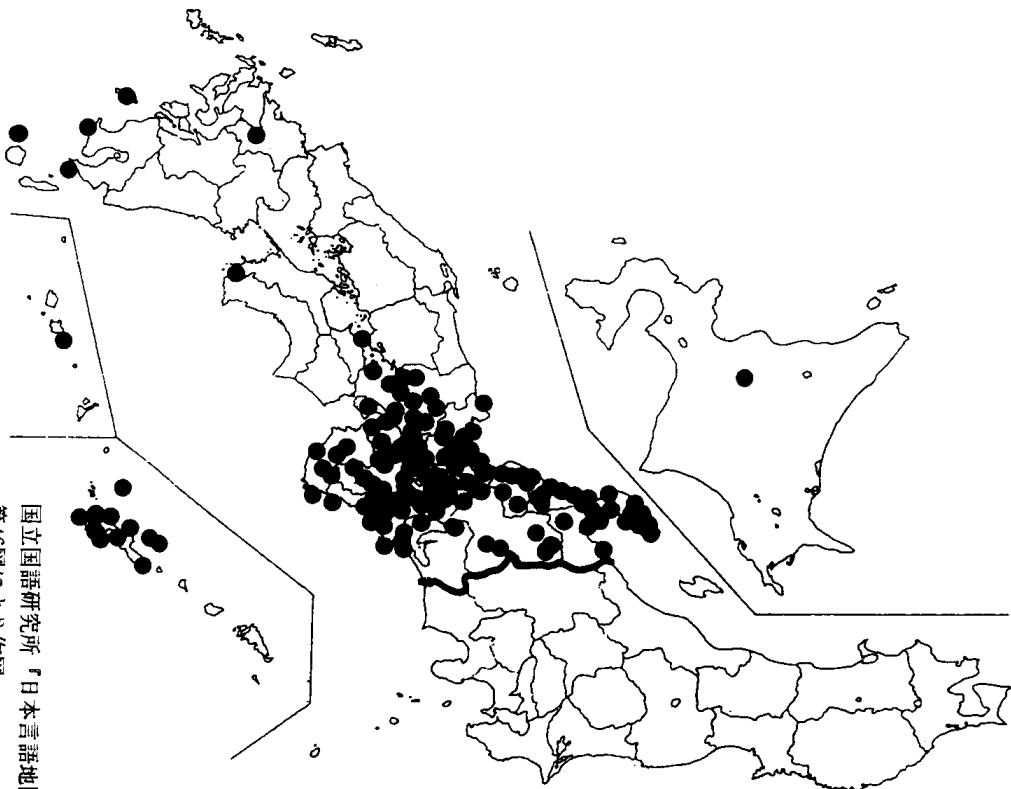
国立国語研究所『方言文法全国地図』  
第110図により作図

② L.A.J. No.46 “(It) is is (fine weather)”

〈〜だ〉の言語地図

〜や = ~YA

● : 分布地点 point



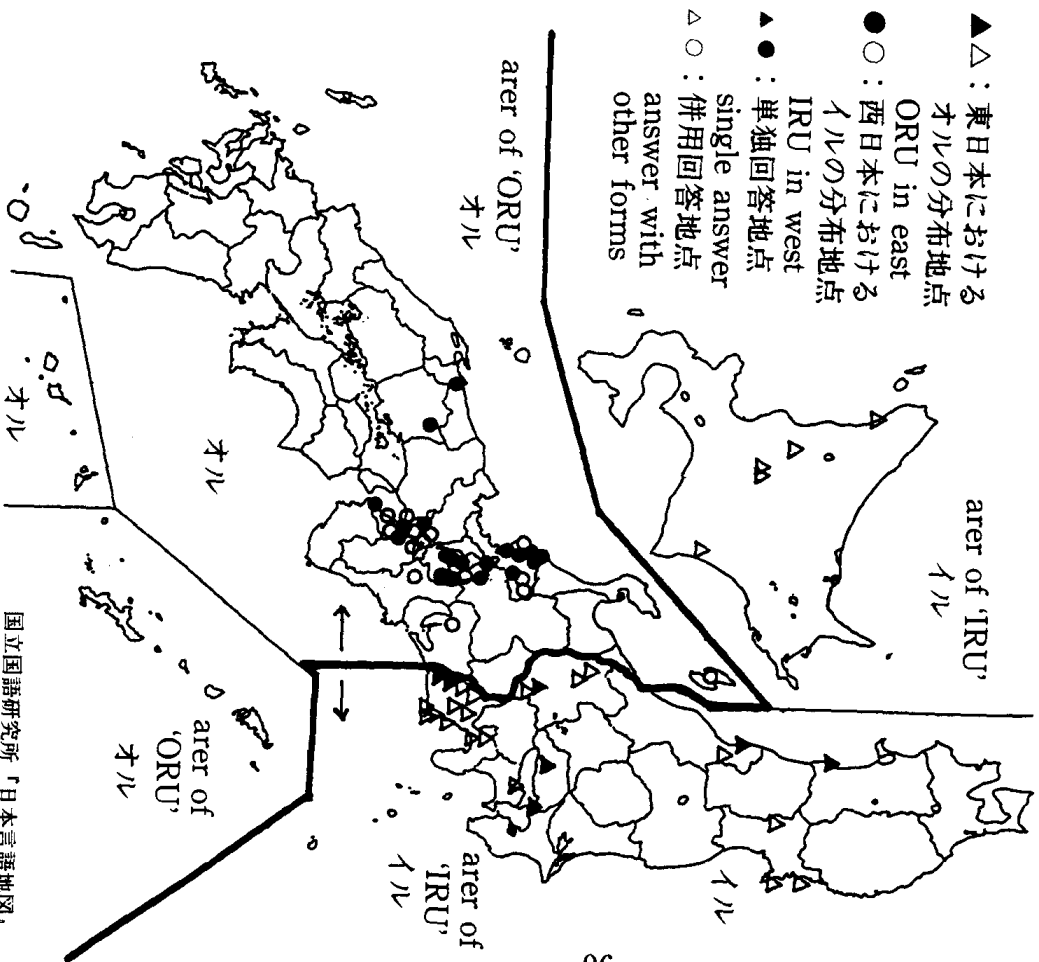
国立国語研究所『日本語地図』  
第46図により作図

① L.A.J. No.53 "to be, to exist"  
 <居る>の言語地図

## II

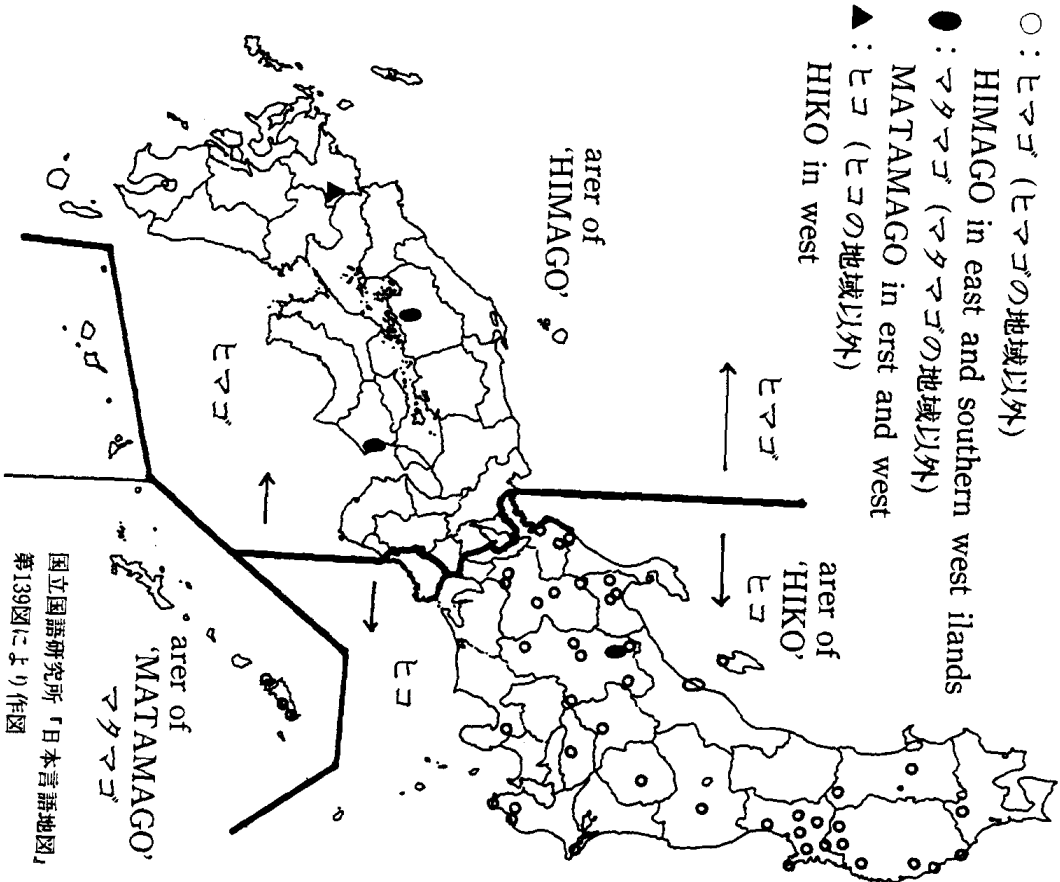
East : IRU  
 West : ORU

## 東西対立分布語形地図



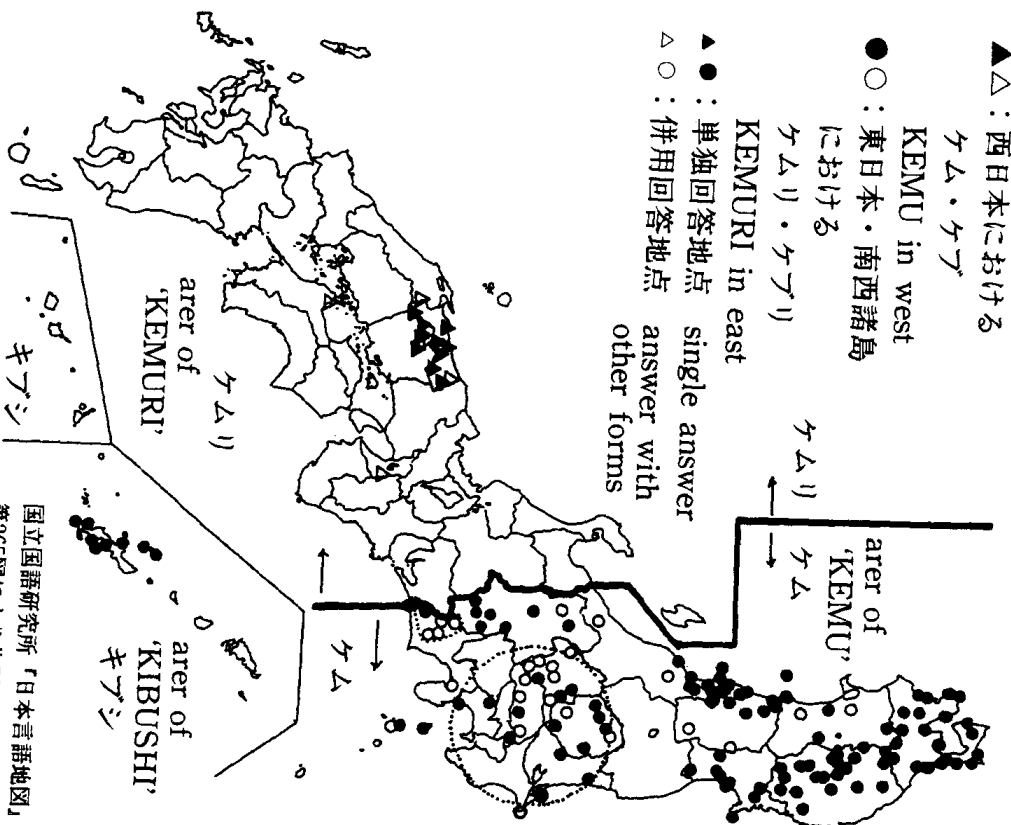
② L.A.J. No.139 "GREAT-GRANDCHILD"  
 <ひまご>の言語地図

East : HIKO  
 West : HIMAGO

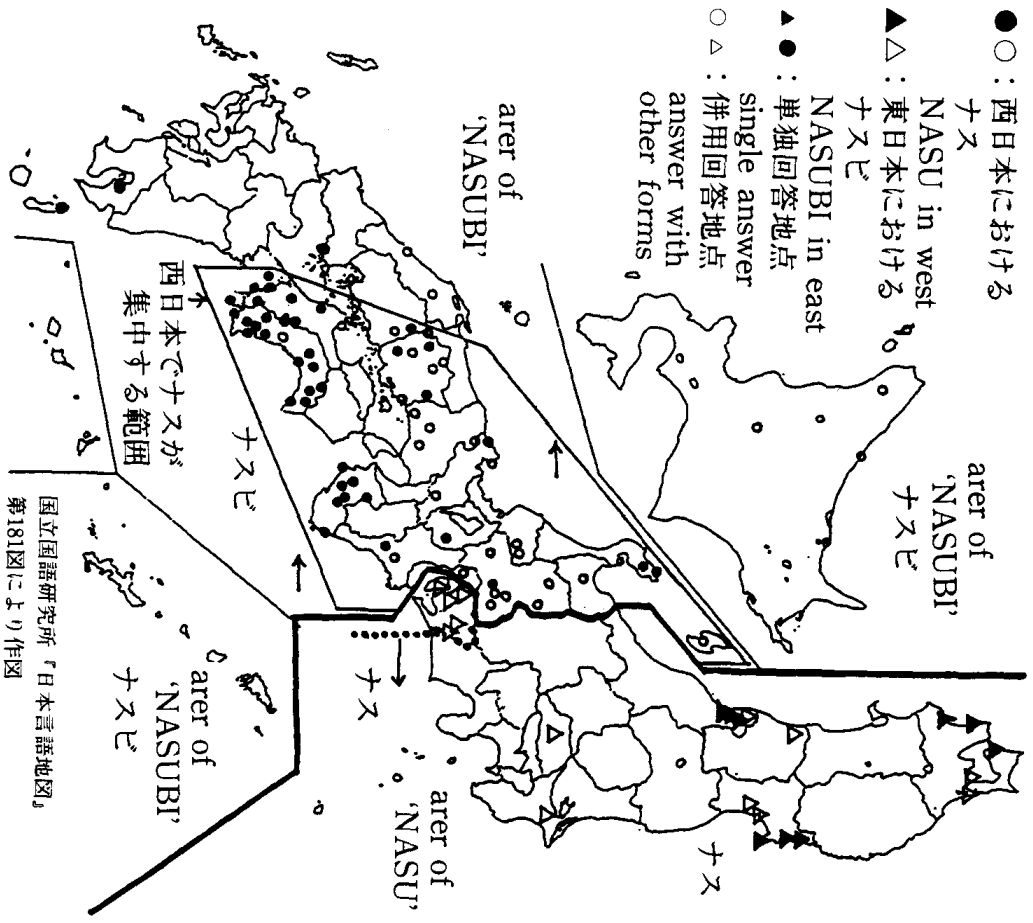


③ L.A.J. No.265 "SMOKE"  
 <煙>の言語地図

East : KEMU  
 West : KEMURI



East : NASU  
 West : NASUBI



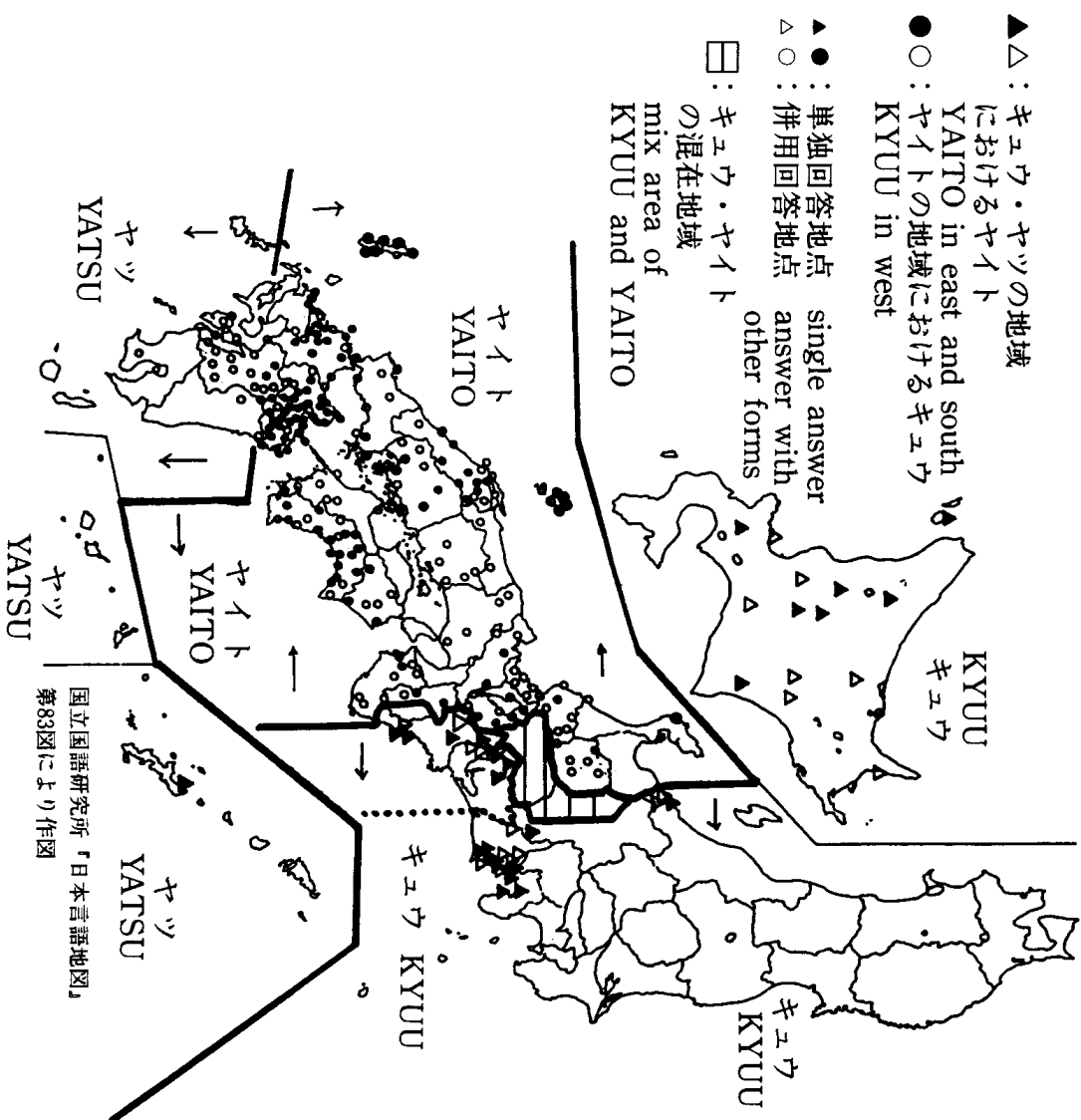
国立国語研究所『日本言語地図』  
 第181図により作図

### III 三地域鼎立分布語形地図



③ L.A.J. No.83 “<to apply> MOXA (object)”  
 <灸 (をすえる)> の言語地図

East : KYUU  
 West : YAITO  
 South : YATSU



国立国語研究所『日本語地図』  
 第83図により作図

## IV 九州分布語形地図

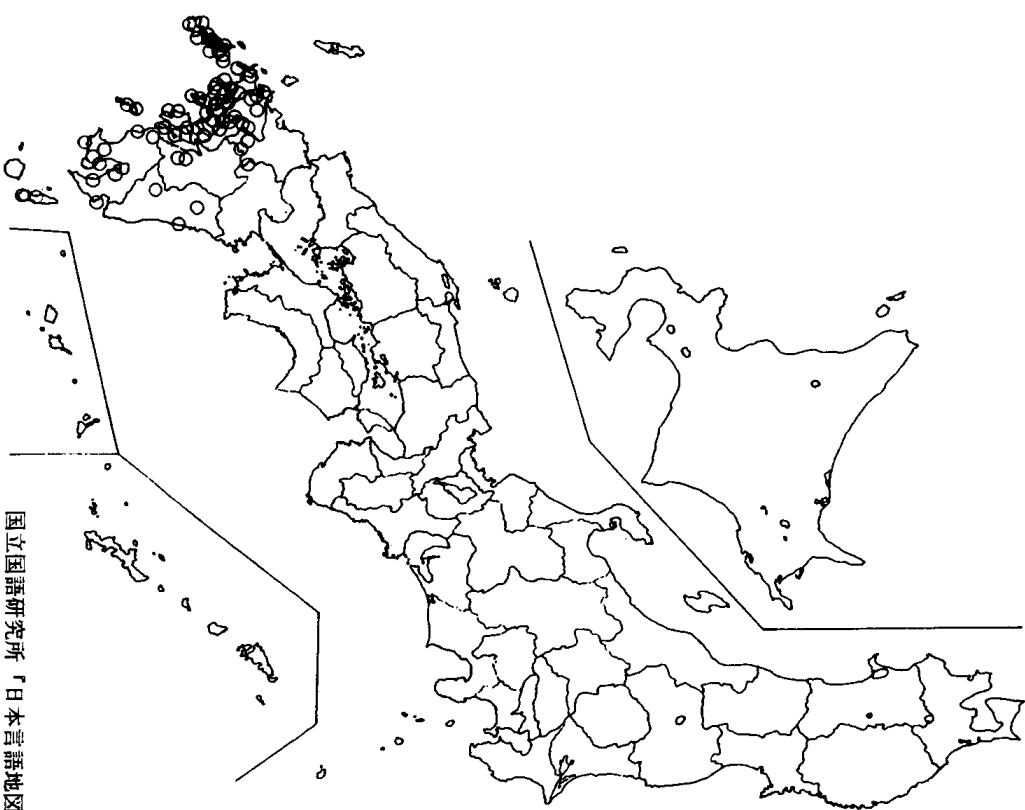


① L.A.J. No.95 “<lightning> STRIKES”

<(雷か?) おちる>の言語地図

アユル=AYURU

○: 分布地点 point



国立国語研究所「日本語地図」  
第95図により作図

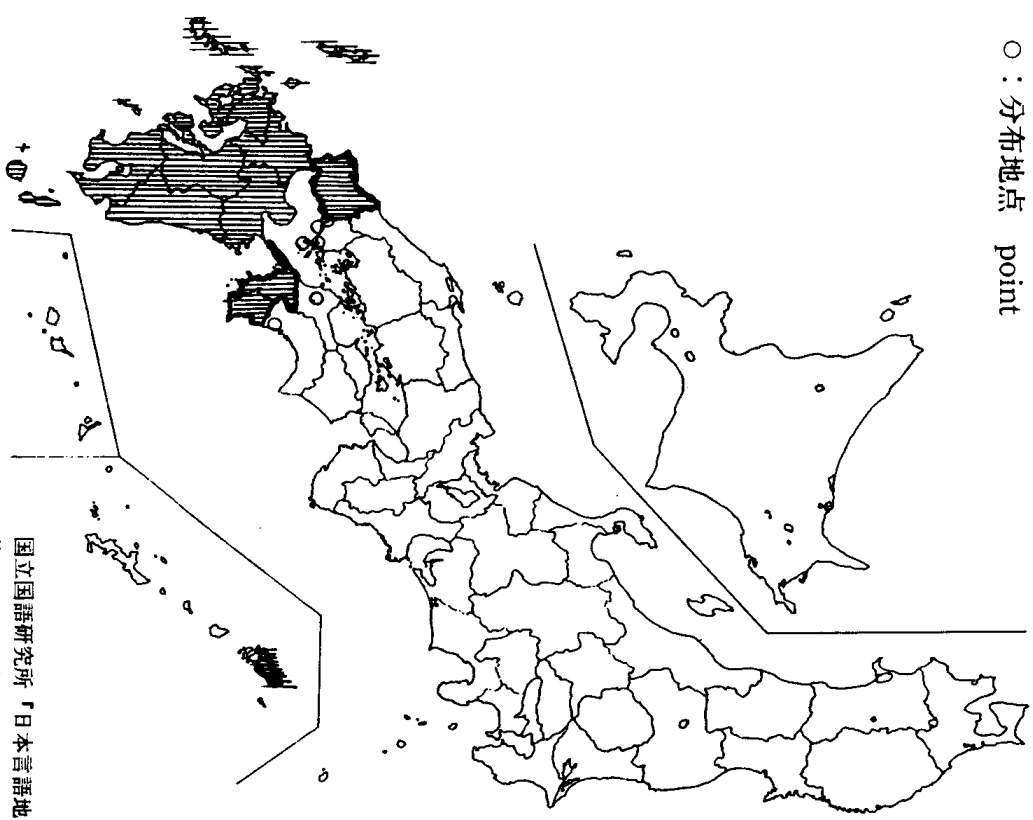
② L.A.J. No.65 “to CARRY (a bundle on one's back)”

<しよう>の言語地図

カルウ=KARUU

▨: 分布地域 area


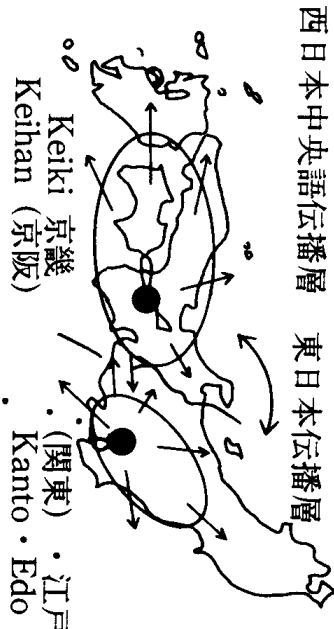
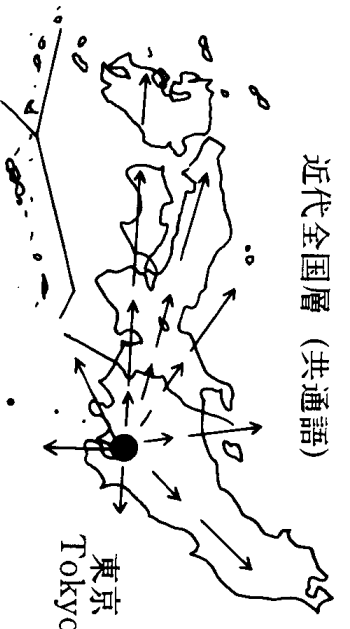
○: 分布地点 point



国立国語研究所「日本語地図」  
第65図により作図

# V 方言圏論から見た日本語方言の重層性

| SEVERAL STRATA in the HISTORICAL FORMATION of JAPANESE DIALECTS<br>(from the view points of the center and the range of distribution) |                   |        |     |
|---|-------------------|--------|-----|
| Stratum   | 方言圏論から見た日本語方言の重層性 | 時代     | Age |
| (? Old Japanese Stratum)  |                   | 文献時代以前 |     |

|   |  |   |  |  |
|---|--|---|--|--|
|   | West Japanese Stratum<br>(spread stratum)  |  <p>西日本中央語伝播層</p> <p>Keiki 京畿<br/>(Nara · Kyoto)</p> <p>東日本伝播層</p> <p>Kanto · Edo (関東)</p> | 上代 · 中古 · 中世 · 近世 · 近代 · 現代<br>8C / 12C  | JYODAI · CHUKO · CHUSEI · KINSEI · KINDAI · GENDAI<br>(ASUKA-NARA · HEIAN · KAMAKURA-MUROMACHI · EDO · MEIJI-TAISHO · SHOWA) |
| West Japanese Stratum<br>(spread stratum) |  <p>西日本中央語伝播層</p> <p>Keiki 京畿<br/>(Nara · Kyoto)</p> <p>東日本伝播層</p> <p>Kanto · Edo (関東)</p> | 上代 · 中古 · 中世 · 近世 · 近代 · 現代<br>8C / 12C   | JYODAI · CHUKO · CHUSEI · KINSEI · KINDAI · GENDAI<br>(ASUKA-NARA · HEIAN · KAMAKURA-MUROMACHI · EDO · MEIJI-TAISHO · SHOWA) |  |
| Common Japanese Stratum                   |  <p>近代全国層 (共通語)</p> <p>東京 Tokyo</p>  | 上代 · 中古 · 中世 · 近世 · 近代 · 現代<br>18C / 20C  | JYODAI · CHUKO · CHUSEI · KINSEI · KINDAI · GENDAI<br>(ASUKA-NARA · HEIAN · KAMAKURA-MUROMACHI · EDO · MEIJI-TAISHO · SHOWA) |  |

- 安部清哉 (1986) 「へ旋風」の言語地理学的解釈——複雑分布の処理を通して——」(『国語学研究』26、昭和61・12)
- 同 (1987) 「全国方言分布の成立過程における四つの層」(『国語学会昭和62年秋季大会要旨集』(岐阜大学)、昭和62・10)
- 同 (1988a) 「へ旋風」の変遷における方言分布の四つの層——古代語彙の二系列——」(『フェリス女学院大学紀要』23、昭和63・3)
- 同 (1988b) 「へ庭」の変遷における方言分布の四つの層」(『文化』51—3・4、昭和63・3)
- 同 (1989a) 「日本言語地図」三辺境分布・東西辺境分布Ⅱ語形図集」(『フェリス女学院大学文学部紀要』24、平成元・3)
- 同 (1989b) 「古代語彙における併存する同(類)義語——目・マナコ型の東西分布——」(『玉藻』24、平成元・3)
- 同 (1989c) 「へ太陽」語彙考」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』十、平成元・12、明治書院)
- 同 (1990) 「上代における日本語の二つの層(上)——カゾフとヨムの場合——」(『玉藻』25、平成2・3)
- 同 (1991) 「三辺境分布」、「旋風」、「太陽」、「旋毛」、「顔」、「眉毛」、「目」、「頬」、「唇」、「舌」、「唾」、「涎」、「顎」、「親指」、「人差指」、「中指」、「薬指」、「小指」、「数える」、「庭」、「畦」、「土竜」、ほか(佐藤亮一監修『方言の読本』、平成3・8、小学館)
- 同 (1993a) 「語彙における伝播の中心地と伝播の範囲による方言分布成立過程の解釈の問題——「方言四層」の補説・修正として——」(『フェリス女学院大学文学部紀要』28、平成5・3)
- 同 (1993b) 「語の『動的運動』と音韻上の『静的作用』とによる方言分布の二重構造の一側面」(『国語学会平成5年春季大会要旨集』、平成5・9)
- 同 (1993c) 「古い方言・新しい方言」(『言語』22—9、平成5・9)
- 同 (1994a) 「古代語と方言——方言の分布と中央語の地理的広がり——」(古橋信孝・三浦佑之・森朝男編『古代文学講座七』、平成6・11、勉誠社)
- 同 (1994b) 「方言周圏論は万能か」「方言にはどのくらい古い言葉が残っているか」(『国文学解釈と教材の研究』39—14、平成6・12)
- 同 (1996a) 「古い方言と新しい方言の問題」[付注版]」(『玉藻』31、平成8・3、安部1993cに参考文献を付し、補注を加えたもの。)

- 同 (1996b) 「へ禿頭」の語史と方言分布——上方出自語同士が江戸語・上方語の対立をなす背景——」(『国語語彙史の研究十五』、平成8・5、和泉書院)
- 同 (1997a) 「古代日本語の動詞重複形 (reduplication) — 一種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題」(加藤正信編『方言・ことばの新研究』、平成9・3予定、明治書院)
- 同 (1997b) 「へ禿頭」の言語地理学的解釈と地方方言史との対照」(『国語論究6——近代語の諸相』、平成9予定、明治書院)
- 同 (1997c) 「動作の併行表現の歴史——上代 動詞終止形重複形・動詞連用形重複形——」(渡辺実博士古稀記念論集刊行会『渡辺実博士古稀記念論集 日本語文法——体系と方法』、明治書院、平成9予定)